

JICA 海外協力隊向け実践ガイド

クロスロード

CROSSROADS

3

2025
MARCH

特集

実践・実技で活動の効果を深めよう

派遣国の横顔 [フィリピン]

主要産業の農林水産分野で多くの隊員が活動
近年は災害対策などの要請も増加

JOCV
60TH
ANNIVERSARY



大学の歯科看護学科で、模型に触れてもらったりと学生が受け身にならないような教え方を工夫しています（東ティモール）

インスタグランプリ

「リアル」を伝える動画で競い合う、インスタグラムの広報企画

2024年10月から12月にかけて、青年海外協力隊事務局の公式Instagramで「インスタグランプリ」を実施しました。昨年に引き続き、二回目の開催です。

「インスタグランプリ」とは、隊員が派遣国で撮影したショート動画を青年海外協力隊事務局の公式Instagramで発信し、それぞれの動画の総再生回数と総再生時間(※)を競うという企画です。派遣国でのJICA海外協力隊事業の魅力やリアルを伝えることを目的として始めました。事務所対抗のコンテスト形式とすることで視聴者と制作者(隊員、VC、事務所スタッフ、派遣先など)の双方に企画を楽しんでもらうことができ、その結果、20を超える国から50本以上の動画が集まりました。

12月20日に結果発表を行い、再生回数と再生時間の各部門の優勝者が発表されました。こちらには、優勝者からいただいたコメントをご紹介します。また、優勝した作品はYouTubeにもアップロードしましたので、Instagramのコンテンツと合わせて下記QRコードからぜひご覧ください。(インスタグランプリ担当インターン)

※動画の総再生回数は視聴者の皆さまも確認が可能です。総再生時間は管理者である事務局アカウントのみから確認ができます。

Congratulations!
優勝者発表!!



再生回数部門

ガーナ

Ghana

〈「幸せ」紹介作品〉

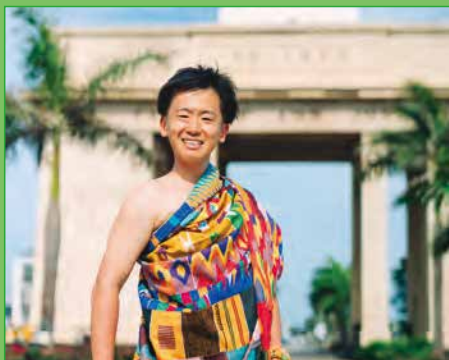
32,116回
再生

「ガーナ人は貧困で不幸」と、日本にいた頃の私は勝手に思い込んでいた。でも、実際には彼らはすでに幸せだった。みんなでご飯を食べ、リズムに乗って踊り、伝統文化を感じる。幸せはここにある。だからこそ、彼らの幸せな時間や種類を増やすのが私の協力隊としての仕事。そのためにパソコンや理科実験などの実践的な教科を教えて、学習の楽しさを子どもたちへ伝えている。教員には仕事への自信ややりがいを楽しんでもらう。それが、私自身にとっての幸せにもなっていく。今回の動画は、私が協力隊活動で感じた「ギャップ」を形にしたものです。

桑名佑典さん(小学校教育/2023年度1次隊)



YouTube



青年海外協力隊事務局の公式Instagramには
さまざまなコンテンツを掲載しております。ぜひフォローしてみてください。
隊員の皆さま、今後も協力隊の広報へのご協力をよろしくお願いいたします!



再生時間部門

ボリビア

Bolivia

〈国の魅力紹介作品〉

37日
3時間16分
再生

「ウユニ塩湖だけがボリビアの魅力ではない!」ボリビアは日本の約3倍の広さを誇り、地域ごとにまるで別の国に来たかのような多様な気候や文化が広がっています。壮大なアンデス山脈、アマゾンの豊かなジャングル、ヨーロッパの雰囲気が残る街並み——これら全てがボリビアの魅力です。その魅力を一人でも多くの方々に伝えたく、今年度もインスタグランプリに参加しました。グランプリを受賞でき、とても嬉しいです!地球の反対側にあるボリビアの素晴らしい魅力、そしてそこで活動する私たち協力隊員の魅力を、これからも発信し続けていきたいです!

ボリビア隊員一同



YouTube



青年海外協力隊事務局
公式Instagram
JICA海外協力隊のリアル
お見せします



JICA_KYORYOKUTAI



COLUMN — 表紙によせて

首都にあるディリ大学歯科看護学科で、むし歯・歯周病予防などの講義や、大学附属診療所での歯石除去の実技指導をしています。写真は歯磨き方法についての講義で、歯に歯垢がつきやすい場所はどこですか?と学生に質問して解答してもらい、歯の模型を使って解説している様子です。学びに楽しさを加え、学生が主体的に参加できる講義内容になるよう心がけて活動しています。
織田千恵さん(サモア/歯科衛生士/2016年度1次隊、東ティモール/歯科衛生士/2023年度2次隊・兵庫県出身)

国別索引	掲載ページ
エジプト	9
エチオピア	11
ガーナ	2
サモア	1
タイ	15
ネパール	14、16
パプアニューギニア	24
東ティモール	1
フィリピン	5、6、7
ボリビア	2、13
ホンジュラス	14
マラウイ	18
ヨルダン	22
ラオス	16
ルワンダ	13、23

職種別索引	掲載ページ
コミュニティ開発	16、18、23、24
防災・災害対策	7
野菜	5
野菜栽培	16
森林経営	14
観光	13
環境教育	13
日本語教育	15
体育	9
小学校教育	2、11
歯科衛生士	1
看護師	6
障害児・者支援	22

出身都道府県別索引	掲載ページ
福島県	23
東京都	5、16
神奈川県	13
静岡県	24
愛知県	14
兵庫県	1、11
島根県	7
広島県	22
愛媛県	6
福岡県	13、18
鹿児島県	15

JICA海外協力隊向け実践ガイド

クロスロード

CROSSROADS

3
2025
MARCH

CONTENTS

- 2 インスタグランプリ優勝者発表
- 3 CONTENTS／索引
- 4 知っていますか? 派遣地域の歴史とこれから
派遣国の横顔 [フィリピン]
- 8 [特集]
実践・実技で
活動の効果を深めよう
- 14 お悩み相談
アドバイスを聞きました!
- 15 みんなのアイデアBOX
- 16 スキルや意欲で道を開く
就職ストーリー
- 18 派遣から始まる未来
先輩隊員たちの社会還元
- 20 INFORMATION
— JICA青年海外協力隊事務局からのお知らせ
- 21 JICA海外協力隊派遣現況
- 22 あの日、地球の、あの場所で。
- 23 隊員めし — 任地の食生活に彩りを!
- 24 公開! 私の派遣国生活 [パプアニューギニア]

『クロスロード』(通常号)は、JICA海外協力隊が活動・生活を円滑に行うための実践的な情報、および帰国後の進路開拓や社会還元をする際の情報を提供する雑誌で、年に9回発行しています。

【凡例】JICA海外協力隊の隊員(経験者を含む)については、次のように表記しています。

国際協力さん(ケニア/環境教育/2024年度1次隊)
氏名 派遣国 職種 隊次

JICA海外協力隊には、「青年海外協力隊」「海外協力隊」「シニア海外協力隊」「日系社会青年海外協力隊」「日系社会海外協力隊」「日系社会シニア海外協力隊」があります。



見やすく読みまちがえにくい
ユニバーサルデザインフォント
を採用しています。





派遣国の横顔

Profile of the partner country of JOCV

第二次世界大戦で深い傷を負いながらも
隊員1,700人の活動が信頼を築いた

Text＝三澤一孔 写真提供＝ご協力いただいた各位

フィリピン共和国

Republic of the Philippines



フィリピンの基礎知識

面積：29万8,170km²（日本の約8割）、7,641の島々がある
人口：1億903万5,343人（2020年フィリピン国勢調査）
首都：マニラ
民族：マレー系が主体。他に中国系、スペイン系および少数民族
言語：国語はフィリピン語、公用語はフィリピン語および英語。180以上の言語がある
宗教：キリスト教。国民の83％がカトリック、その他のキリスト教が10％。イスラム教は5％（ミンダナオではイスラム教徒が人口の2割以上）

※2023年3月1日現在
出典：外務省ホームページ
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/philippines/index.html>

派遣実績

派遣取極締結日：1966年2月15日
派遣取極締結地：マニラ
派遣開始：1966年2月
派遣隊員累計：1,701人
※2025年1月31日現在
出典：国際協力機構（JICA）



フィリピンでは水牛を乳牛、食肉、農業に活用している

健医療を柱にしています。また、貧困問題に取り組む隊員を地方に派遣してほしいという政府からのニーズにも応えています。

フィリピン人は仕事とプライベートの分け隔てがありません。配属先同僚が家族の誕生日会や親戚の集まりに招いてくれることもよくあります。最初は戸惑うかもしれませんが、現地の文化を知る機会ですから参加してみるとよいと思います。

無数の島々と多様な言語があるフィリピンは、島や地域によって特長もさまざま。約15年間フィリピンにいる私でも、未だに初めて知る風習や文化、言葉に出合うことは多いです。

南国リゾートとして旅行でフィリピンを訪れる日本人は多いですが、数日の滞在では見られないフィリピン社会の現実を活動を通じて経験し、次の隊員たちにつないでいって欲しいと思います。

派遣国の横顔

農業を中心として派遣が続く
保健医療や防災対策など
命を守る活動でも隊員が活躍

「未知の海外で活動したい」と初代隊員に
難しかった雨期の野菜栽培を可能にした

海外への渡航が一般的でなかった時代、「多くの人にとって未知の海外で活動したい！そのために農業技術を身につけよう」と考えた矢澤佐太郎さんは、農業大学で海外農業開発を学び、卒業後、伝習農場で農業経営の指導を行う中、海外協力隊員の初代募集を目にして応募した。訓練所で出会った同期隊員たちは皆若く、知らない国で活躍したいという意欲に満ちていた。

2カ月ほどの訓練を終えた矢澤さんは、1966年2月にフィリピンに到着。受け入れ機関は大統領府地域社会開発庁（以下、PACD）で、派遣地域はルソン島の北部地域だった。「赴任した地域は山岳地帯で、中心都市のバギオには第二次世界大戦末期に日本軍の司令部が置かれ、その頃から治安が安定していて、現地の人々の日本人に対する印象も良好でした」

具体的な配属先や活動内容は決まっておらず、PACDの職員と共に10日間ほど地域を見て回った中から、「どこで活動するか決めてください」と言われた。

矢澤さんはバギオの隣町ラ・トリニダッドの町を拠点にすることにした。ここは比較的標高が高く、トマトやキャベツ、ジャガイモなど高原野菜の生産地だったからだ。しかし、農民たちには、雨期に野菜がうまく栽培できないという悩みがあった。

「熱帯気候のフィリピンでは高地は湿度が高く、特に雨期に

山中に小規模ダムを造る活動をしていた矢澤さんの同期隊員たち。バギオの町に下るのは週に1回だったという



Philippines

や ざ れ さ た ろ う
矢澤佐太郎さん
野菜／1965年度1次隊・東京都出身



PROFILE

子どもの頃に読んだ冒険漫画『少年ケニヤ』（山川惣治作）をきっかけに海外に興味を持つようになる。東京農業大学で学び、卒業後は八ヶ岳経営伝習農場で農業経営を重視した農家の子弟教育に従事する。協力隊では初代隊員としてフィリピンに派遣され、帰国後はOTCA（現JICA）農業研修員の技術指導に当たる。またネパール、スリランカ、パラグアイ、ドミニカ共和国に専門家として派遣され野菜栽培の指導・普及に努めた。定年退職後も地域の畑で野菜の有機栽培に取り組んでいる。



フィリピンで活動してきた2年間、矢澤さんの片腕となって尽力してくれたレイモンドさんと一緒に。後ろに見えるのが建設中のビニール雨よけハウス

は雨で跳ね上がった土が葉につき、土の中の病原菌に感染する。高原野菜は病気に弱い種類が多いので、雨期の栽培は難しかったのです」

そこで矢澤さんが考えたのは、雨よけのビニールハウスを設置することだった。「まずは圃場の確保と資金調達だ」と動きだした矢澤さんは、目星をつけた相手との交渉を始めた。カウンターパートはいない時代、ホームステイ先の大家のフォローにも支えられながら約4カ月後、圃場用地は地元の農学校の敷地内に確保でき、資金は町から「後で返済すること」という条件で借りることができた。

約0.7haの圃場は、現地の方と2人で草取りなど開墾作業から始め、ハウスは同期の土木隊員らに協力してもらい立派なものを設置した。矢澤さんは看板を立て、「ここは展示圃場です。興味ある人は見学してください」と書いた。

当初、「日本の青年が来て、いったい何をやっているのだろう？」と怪しむ様子だった現地の人々は、ハウスの中で雨期でも見事に野菜が育っていることを見ると、矢澤さんを見る目が変わった。「農家の人から栽培に関する相談を受けるようになりました。そんな時は『君の畑を見せてよ』と現地を見に行き、竹などで組む簡易な雨よけハウスの作り方や栽培方法に関するアドバイスをしました。小規模農家の方々に直接教えることで技

術が伝えられたと実感したし、『おかげで野菜がたくさん採れたよ!』と報告を受けることが喜びになりました」

盆地であるラ・トリニダッドが巨大台風に襲われ、ハウスが半壊し水没するなど困難も経験したが、圃場では1年目から多くの野菜が収穫でき、市場に卸して町に資金を返還することができた。現在のラ・トリニダッドには、数多くのビニールハウスが立ち並んでいる。

伝統的産婆による自宅出産が多い地域で 助産師が助助する分娩施設の設置を実現

益田亜都美さんは2007年、看護師隊員としてレイテ島のタナウン町役場の保健事務所に派遣された。保健事務所は保健所本部と5カ所の小保健所を統括しており、住民の健康維持のために医師による診察や巡回診療を行っている。益田さんへの要請内容は、母子保健と家族計画の質の向上を目指したスタッフの人材育成などだった。^{さん}「任地では自宅で出産する人が多く、伝統的産婆による介助では、へその緒を竹のナイフで切って縫い糸で縛るという処置がされる場合もあり、母子共に感染症を起こす危険性が大きい状況でした。配属先の医師に分娩施設の必要性なども話したのですが、『これまで施設なしでやってきた。住民からの希望がなければ要らない』と言われ、意識の違いを感じていました」

益田さんはまず地域の実態を把握するためにアンケート調査を開始した。看護師や助産師と共に村を回り、6歳以下の子を持つ母親を対象に全49問の質問に答えてもらった。内容は出産回数、亡くなった乳児の人数、妊婦健診はいつ受けたかなど。そして「分娩のための施設が必要だと思うか」という質問も設けた。

60人の母親に聞いた結果、実に全員が分娩施設を希望していた。最も多い出産方法は自宅で伝統的産婆の介助を受ける人たちで約50%、自宅出産で助産師に来てもらう人が約22%、病院で出産できている人はわずか30%ほどだった。



村を巡回して母親たちにアンケート調査を行う益田さん。こうした調査はそれまで行われておらず、結果はスタッフの意識を変える重要な資料となった。活動初期から習得に努めてきた現地のワライワライ語を使って村の人々と交流した

ますだ あづ み
益田亜都美 (旧姓 十亀) さん
看護師／2007年度1次隊・愛媛県出身



PROFILE

子どもの頃から看護師を目指し、専門学校を卒業後、総合病院の内科病棟や集中治療室、循環器疾患集中治療室などで約9年間勤務した。同僚から誘われて募集説明会に参加し協力隊に興味を持ち、看護師としての経験と視野を広げたいと参加した。帰国後は東日本大震災被災者の支援に携わった後、看護師として働きながら大学・大学院に進学。結婚し子育て中の現在は高齢者のデイケアに携わっている。

益田さんは施設設置に向けて動きだした。資金は日本大使館の協力を受けることにして、申請書類作成を医師に依頼した。「外から来た私ではなく、現地の医師に必要なだと認識して申請してもらいたかったのですが、なかなか手をつけてくれず、かなりストレスを感じました。最終的にはJICAフィリピン事務所の次長からもプッシュしてくれて、提出にこぎ着けました」。

調査結果からは、住民の母子保健に関する知識が不足している現状も判明した。看護師や助産師が妊産婦やその家族に対して正しい知識を教えるべきだが、彼女たちの腰は重かった。そんな中、配属先に生後2カ月の乳児が運び込まれてきた。全身の皮膚が赤くただれ、かさぶた状になっていた。

「その子の母親は『火曜日と金曜日に風呂に入れると病気になる』という迷信を信じ、しかも他の曜日にも入浴させていなかったのです。乳児の高い死亡率、感染症発生の多さを目の当たりにして、スタッフたちも本気で取り組まなければならないと徐々に意識が変わっていきました」

益田さんは毎週火曜日の妊婦健診に訪れた母親を対象にした「両親学級」を立ち上げた。教材や内容は益田さんが現地語のワライワライ語で作り、進行はスタッフに託した。彼女たちが自発的に取り組んでくれることを粘り強く待ち、両親学級を行った時には思い切り褒めた。^{もくよく}沐浴、妊娠中の過ごし方、妊婦の栄養管理、子どもへの予防接種など、必要な知識を説明してもらった。そのうち、見学に来ていた小保健所の助産師から「私の地域でも行ってほしい」という要望も挙がるようになり、すべての小保健所に広がっていった。

資金協力を受けて建設が進められた分娩施設は益田さんの帰国後に完成し、数年後にフィリピンを再訪した際、実際に使われている様子を見ることができた。

土砂災害が起こりやすい地域で 防災意識を小学生に伝えている

消防本部を休職して参加した山本土温さんは、ルソン島北部のラ・トリニダッド町役場の災害危機軽減管理事務所に赴任し、防災・災害対策隊員として活動している。



山本さんは残りの任期で町内30の小学校で防災授業を行うことを目指している

山本さんは配属先の上司から「小学生の災害対策意識の向上を図るために、先生が実施できる防災授業を提案してほしい」と依頼された。内容には地震・洪水・土砂崩れ対策を盛り込むように指示された。

山本さんが特に子どもたちに伝えたいことが、土砂災害のリスクについてだ。大半が山間地で占められるラ・トリニダッドでは、近年の人口増に伴い急傾斜地にも住宅が造成されており、土砂災害が発生しやすく、過去にも大規模な地滑りが起こっている。

「住民は災害は経験しているものの、災害が起きるメカニズムは意識していない様子でした。そのため、自分たちでできる対策への認識が欠けていると思いました。例えば、町の排水溝を詰まらせないようにごみを捨てないことなど、市民にできる対策もあるのです」

山本さんは防災授業で使うプレゼンテーションを試作して、実践の中でブラッシュアップしていくことにした。ポイントはアニメーションを取り入れたことだ。例えば土砂崩れが起きる仕組みを説明する時は、〈住民が増えた→傾斜地の木を伐採して土を盛った→その上に家を建てた→長雨が降ってきた→盛り土の部分が家ごと流される〉といった一連

活動の舞台(裏) — クリスマスは9月から盛大に

「フィリピンでは『Ber months (バーマンス) はクリスマス』という言葉があります。12月(ディセンバー)だけでなく、最後にBer (バー) がつく9、10、11月もお祝いするという意味です。それでは年の3分の1ですが、決して誇張ではありません」

JICAフィリピン事務所の浅田恵理さんはそう話す。9月に入ると家々や街中には、大きなクリスマスツリーや伝統的な星型のランタン「パロル」が飾られ、マライア・キャリアのクリスマスソングが流れる。「どの職場でもクリスマスパーティーに向けた委員会が結成され、ダンスの練習が始まります。この時期はクリスマスのために仕事と同じくらいのエネルギーが注力されているようです」

プレゼント交換も気前よく行われ、ドライバーや警備員などのスタッフ、マンションの管理人たちなど、日頃お世話になっている人たちに感謝の気持ちと共にプレゼントを贈る。パーティーが続くため、クリスマスでボーナスを使い切ってしまう人も多いとか。

やまもと し おん
山本土温さん
防災・災害対策／2023年度2次隊・
島根県出身



PROFILE

高校卒業後、地元の消防本部に就職し約4年間、消防・救急・レスキュー活動に従事してきた。地域の外国人に日本語を教えるボランティア活動を行う中で、異文化交流に興味を持つと同時に協力隊経験者とも知り合い、協力隊への参加を目指すようになった。帰国後も地元・島根に貢献できるよう、防災・災害対策を職種にし、知識を身につけながらフィリピンで活動している。

の流れをイラストの動きでわかりやすく示した。「小学生の時、歴史の先生が授業で歴史を描いたアニメ作品を流して教えてくれて、その授業は成績がとても良かったことを思い出し、アニメーションを取り入れました」

5校で防災授業を行い、クイズ形式で進めたところ、子どもたちが集中して参加してくれた。アニメーションによって、災害に詳しくない先生方にとっても負担なく実施できるプレゼンテーションが完成した。山本さんは、子どもたちだけでなく家族も意識して「川の水の色が変わったら危険が近づいているサインだから、お父さんやお母さんに、一緒に逃げようと伝えて」と呼びかけた。

山本さんは、フィリピンに日本にはない良さを感じているという。「同僚に自分の考えを提案すると、快く受け入れてくれます。さらにより良くするためのアドバイスをくれることも嬉しいです。小学生向けに作った授業のマニュアルを基に保育園児向けを作ってくれた同僚もいました。小学校に巡回すると、子どもたちも先生方もとても歓迎してくれます。第二次大戦ではルソン島でも多くの被害者が出ましたが、フィリピンの発展に尽力してきた協力隊員の先輩方の存在があって、自分が受け入れられているのだと思います」。



上：打ち上げ花火で盛大に祝うフィリピンのクリスマス風景 下：配属先のクリスマスパーティーでダンスをする益田亜都美さん(左から2人目)

特集

実践・実技で

活動の効果を

深めよう

協力隊員が活動する国々の多くでは、教育現場をはじめとして物事の伝え方が知識偏重型になっていることが少なくない。もちろん、現地の習慣や予算不足など、各地域・配属先の事情によりやむを得ない場合もあるが、工夫次第では、今までにないやり方を提案できるかもしれない。今回はそうした事例をいくつか紹介していきたい。

Text=秋山真由美 写真提供=ご協力いただいた各位

CASE

1

現地教員も巻き込み研修会実施 体育の理解を促進し、 子どもの運動量が 8倍に！



エジプト体育分科会

体育に関わる隊員間で各EJSでの課題を持ち寄り、EJS全体での日本式体育の普及促進に努めるという目的を掲げて2023年5月に発足した。取材時（2025年1月）のメンバー数は7人で、発足からの累計メンバー数は12人。

課題

道具より、先生の指導力と
子どもの運動量が足りない

エジプトでは、2018年から日直、学級会、掃除、運動会など、日本の学校ではおなじみの日本式教育を取り入れた公立小学校の設立が進められている。これらはエジプト日本学校（以下、EJS）と呼ばれ、エジプト全土に55校ある（25年1月現在）。各EJSでは現地に根差した日本式教育の実践と普及のために多くの協力隊員が活動しているが、赴任直後から自分たちの知る日本式教育と現地で展開されている授業とのギャップや課題を感じる協力隊員も少なくない。首都カイロ近郊のギザにあるEJSで23年から活動している緒方彩夏さん（体育／2023年度2次隊）もその一人だ。「私が配属されているのは、300人程度の中規模校ですが、赴任してすぐの頃、体育の授業では毎回サッカーをやっていて、これは授業なのか遊びなのか疑問に思うほどでした。日本であれば、学習指導要領などに沿って、年間指導計画を立て、学習の見通しをもって授業を進めていくはずですが、そもそも年間の授業計画がないようでした」

22年からEJSスエズ校で活動している阿部璃音さん（体育／2022年度3次隊）も同じく体育の授業に課題意識を持ってきた。「ある日の授業で、先生1人が子ども30人を並ばせて一人ひとり順番に前転するのを見ていました。待ち時間が長く、計算すると、子どもは80分の授業中1人3～5分しか動いていませんでした。十分な運動量を確保できていないとは思えず、これは困った状況だと感じました」

2人は、同じ体育分野の隊員たちから成る「体育分科会」のメンバーとしても活動してきた。23年5月に発足した体育分科会では、定期的にカイロに集まり、メンバー同士の知識や経験を共有し、多様な視点から問題解決に取り組んでいる。

その中で情報交換をすると、他のメンバーの学校も似たような状況であり、授業の組み立て方や子どもたちの運動量の少なさなどの課題を抱えていたという。

「EJSは働く先生も通う生徒もエジプト人。先生たちは基本的に勉強熱心で子ども思いですが、自分自身が日本の教育を受けていな

いのでやり方がわからないのです。まずは、日本式体育とはなんぞやと、概念を共有する場を設ける必要があると感じました」（阿部さん）

そこで、分科会のメンバーはエジプト全土のEJSの体育教員を集め、「研修会」という形で日本式体育について理解を深めてもらおうと考えた。ところが、EJSを管轄するエジプト教育省プロジェクトマネジメントユニット（以下、PMU）に「研修会をやらせてほしい」とプレゼンしたところ、体育の意義を十分伝えられていなかったこともあり、最初は「練り直し」と一蹴されてしまった。EJSに配属されているJICA専門家からのサポートも受けながら、やっと許可が下りたのは3回目のプレゼンでのことだった。

PMU経由ですべてのEJSの体育教員にリクエストレターを送ってもらったのは開催予定日の3カ月前。それから毎週末集まり、教育省との交渉、会場の日程調整、当日のプログラムやグループ決めなどの準備を行い、開催3～4日前には会場近隣の小学校を訪ねてボールなどの用具を借りて回った。「ギリギリまで準備に追われ、本当に開催できるのか不安でした」（阿部さん）。そんな研修の成果はどのように表れたのだろうか？



学校の先生に向け、体育の意義を説明する様子



PMUへのプレゼン（写真は第2回研修会の時のもの）

工夫

現地の先生を巻き込んだ研修会で理解を深め、意欲を引き出す

23年9月、ギザにある研修宿泊施設にエジプト全土から約80名の体育教員が集まり、第1回の研修会が2泊3日で行われた。テーマは「日本式体育の基礎」。協力隊技術顧問でもある日本体育大学の白旗和也教授を招き、体育の意義について講義してもらった後、グループワークでのディスカッションや模擬運動会の体験など、なるべく一方通行ではないプログラムを提供した。「EJSではUNDOKAI（運動会）の実施も義務の一つですが、エジプト人の先生からは単なるスポーツデーだと思われることも。しっかりと目的と意義が伝わるように、模擬運動会では参加する先生に先生役と生徒役をお願いし、行事運営も学んでもらいました。私たちが一方的に指導する形ではなく、研修で学んだことをそのまま学校に持ち帰って実践してもらえるように工夫しました」（阿部さん）

第1回は盛況のうちに幕を閉じ、参加した教員たちからは「次はいつ開催するんだ？」という声も多く上がった。PMUの理解と関心も得られ、その後はプレゼンが通りやすくなったという。24年2月には「子どもの思考力を育てる」、同年9月には「楽しくて安全な体育の授業」というテーマで研修を開催し、いずれも110～120人が参加した。

研修後、EJSの体育教員全員参加のグループチャットを作成すると、「こんな運動会をやったよ」「こんな時はどうしてる？」「私の学校で研究授業をやるから見に来て」など、教員同士のやりとりが見られるようになった。

「横のつながりが生まれ、教員同士で相談し合える状況ができて



第2回研修からは一部の教員に準備段階から参加してもらい、授業案の作成や事前検討会などを体験できるようにした



研修会で体育の授業を実践・体験する先生たち

改善前



前転をするためのマットが1枚しか用意されておらず、児童はほとんどの時間を並んで待つだけだった

改善後



あらかじめ計画・準備をして複数のマットで並行して取り組ませるように改善。児童の運動できる時間が格段に増えた

つあります。研究授業で素晴らしい指導案を見せてもらった時には研修の成果を実感しました。私たちの意図をくみ取り、それぞれの学校で実践してくれる先生が増えたことは本当に嬉しい成果です」（阿部さん）

先生たちの意識と共に、学校の子どもたちにも変化があった。「私の配属先では先生がきちんと授業準備をするようになり、以前は1人5分ほどだった運動量が今では8倍に。多様な競技や運動を取り入れることで、以前は体育が楽しくないと言っていた子どもたちも、今では『すごく楽しい』と言ってってくれています」（阿部さん）

25年1月末の4回目の研修会のテーマは「各競技における準備運動」。阿部さんは開催直後に任期を終えて帰国し、緒方さんが4代目の会長として分科会の活動を引き継いでいく。「私たち協力隊員がいつまでも研修会を主催し続けられるとは限りません。今後は、意欲ある人材を発掘し、研修会自体の担い手を育成できるようにしたい。最終的には日本人が介在しなくてもこの活動が続けられるように、エジプト人だけで研修会が運営できることが理想です」（緒方さん）

23年の発足から歴代体育隊員が思いをつなげてきた分科会の取り組みが、大きな成果を結び始めている。

CASE

2 創意工夫で図工の授業 児童と教員の 意欲を引き出す

えびざわあつこ
海老澤敦子（旧姓 村上）さん
エチオピア／小学校教育／
2015年度1次隊・兵庫県出身



幼少期から図工が好きで、大学では外国語教育について学ぶ。小学校教員として数年の経験を積んだ後、協力隊に参加し、帰国後も学校現場に戻る。現在はエチオピア産のレザーなどで小物類を作る革作家に転身して活動中。

課題

予算も材料もなく、実技は宿題 “色”がない知識偏重型授業

公立小学校の教員として4年間働いていた海老澤敦子さんは、「30歳になるまでに海外にチャレンジしたい」と27歳の時に現職教員特別参加制度を利用して協力隊に参加した。配属先はエチオピアの首都アディスアベバにあるマサラットエチオピア小学校。低学年のクラスで、保健体育・音楽・図工が一つに統合された「エステティクス」という情操教育科目の授業を担当することになった。ところが、出だしから失敗してしまったと苦笑する。

「赴任したばかりなのに、『日本ではこうだよ』と日本のやり方ばかり紹介していたら、カウンターパート（以下、CP）の先生から『エチオピアにはエチオピアのやり方があるんだ!』と言われ、大げんかしてしまったのです。隊員あるあるだと思いますが、張り切り過ぎて空回りしてしまいました。今振り返ると反省点ばかりです」

結局、低学年のエステティクスから、5・6年生の図工を担当することに変わった海老澤さん。大学では音楽を学んでいた図工の知識がないという新しいCPとは、チームティーチングでうまく役割分担して、授業を進めることができた。しかし、エチオピアの図工の授業は、先生が黒板に書いたことを子どもたちがボールペンでノートに書き写すだけ。赤と青を混ぜたら紫になると説明され



図工の授業は知識を教えることに偏ってしまっていた

ても、児童は実際に絵の具で試してみることができない。「知識偏重型で、図工の授業なのに“色”がないことに衝撃を受けました」。

授業では理論を教え、実技は「宿題」として家で取り組むように言われる。すると、家庭環境や貧富の差が顕著に出るため、宿題ができる子とできない子で経験の差が開いていく。

「できない子はずっとできないままです。作品が飾られるのは優秀な子に限られ、クラスメイトの作品をお互いに鑑賞し合う機会もありませんでした」

狭い教室に児童50人がぎゅうぎゅう詰めに座って授業を受け、教科書は配布されず、工作に必要な材料や道具もない。先生自身もハサミやカッターなどの道具の使い方がわからず、実技を教えるイメージが持てないようだった。

「実技を通じて児童自身の考えで工夫したり、試行錯誤したりすることで表現力や創造力、協調性が身につきます。文化の違いといっせえばそれまでですが、せっかく日本から来たのだから一つでも事例を残して帰りたい。教室で創作をすることをやってみようと決めました」

海老澤さんはさっそく道具や材料を買うための予算を出してくれるよう校長にかけ合ったが、返ってきたのは予期せぬ言葉だった。「算数や理科に割く予算はあるが、アートのために割く予算はない。アートが国の発展のために役立つのか?」

海老澤さんは返す言葉が見つからず、結局、予算は下りなかった。「確かに、服もボロボロで、明日のご飯も食べられるかどうかかわからないような子どももいる社会で、紙や絵の具にお金をかけている場合ではないですよね。一方で、自分の手を信頼し、何かを作っている時間の豊かさは何にも代え難いものだと思います。それを伝えられないことがもどかしく感じました」

1クラス当たりの児童数がかなり多いエチオピアの学校



工夫

創作に意欲を見せる児童の姿を示して 親や教員の理解を深める

図工の授業が持つ価値を理解してもらうためには児童の作品を見てもらうしかない。海老澤さんはひとまず現地業務費を使って画用紙を買い、持参した折り紙や現地の羊革を使って児童にポストカードを作ってもらった。

それらのカードを郵便局で外国人に向けて売ってもらえることになり、その資金でハサミ、カッター、色鉛筆などを導入することができた。消耗品であるのは小麦粉と水を熱する方法で手作りし、絵の具は市販されている色の粉や木炭などで代用して予算を節約。そうして用意した道具と材料で初めて実技を行うと、児童たちは大喜びしてくれた。

ただ、道具を家に持ち帰ってしまう子も少なくなく、道具の管理には苦労した。そこで、一つ一つの道具に番号を振り、班ごとに配布と回収をすると、徐々に「学校の物は返さなければいけない」と意識できるようになっていった。

完成した作品はなるべく職員室や廊下などに飾り、目に触れやすくした。児童の作った絵やモビールで校内が明るく華やかになっていくと、校長や他の教科の先生も理解や関心を示してくれるようになった。実技の授業は月に2～3回時間割に組み込まれ、足りなかった授業時間も1コマから2コマに増やしてもらうことができた。

さらに作品が増えると、もっと多くの人に見てほしいという話になり、海老澤さんが「日本には図工展がある」と写真などを見せて提案すると、同僚の先生たちも「やろう!」と賛同してくれた。こうして、児童の制作意欲の向上と保護者への情報発信を目的とした校内・市内初の「アートフェスティバル」の開催が決まった。

保護者に見てもらうため、フェスティバルは保護者会の日に合



市内の先生に作品説明をする海老澤さん

わせて実施することになった。平面作品だけでなく、張り子のランプシェードやペットボトルにデコレーションした立体作品など、5・6年生100名全員の作品を飾る。

また、約80の民族が存在するエチオピアでは児童のルーツも多様だ。それを表現するために班ごとに協力し、さまざまな民族衣装を着て踊る子どもの等身大の貼り絵を約3週間かけて完成させると、子どもたちは歓声を上げた。「何をどう作ろうかと頭の中で考えながら形をつくっていく、その手で行われているのは生きることそのもの。子どもたちの姿を見ていて、つくことは本能であり、人間の根源的な営みなのだと感じました」

当日は、同期隊員たちにも協力してもらい、^{たこ}風作りのワークショップやフェイスペイントのコーナーも設けた。多くの来場者に向かって、校長先生が「アート教育をやってくれたアツコです」と紹介してくれた。

「ママ、これ僕のだよ!」と自分の作品を笑顔で指差す児童と、その傍らで作品を見つめる母親。「その後ろ姿が今でも思い起こされます」。

2年目からは校長にも認められて図工に予算が下りようになった。CPの意欲も向上し、積極的に授業に実技を取り入れ、授業準備にも力を入れるようになった。「いくら言葉を並べても伝わらないことはあります。一步步づつ関係性をつくり、子どもたちが楽しんでいる姿、作品が増えていく過程を見てもらう。そんなやり方があっていいんじゃないかと思います」

自分たちの作品を見せる児童たち



左：教室に導入した文房具。皆で作ったポストカードで購入したことで、共有のものという意識にもつながった
右：児童への指導にあたる先生



まだまだある！実践を生かした活動いろいろ

ホテル業務の実体験

ホテル従業員を目指す学生のため 現場での実習機会を開拓



いのうえのりえ
井上理恵さん
ルワンダ／観光／
2015年度4次隊・神奈川県出身

本コラムの
記事全文はコチラ
(クロスロード2023年6月号)



ハウスキーピングの実習で学生にベッドメイキングのやり方を教える様子

8年間のホテル勤務経験を生かし、ルワンダ東部県カヨンザ郡のカヨンザ職業訓練校でホテルコースの授業を担当した井上理恵さん。カスタマーケアやハウスキーピングなどホテル従業員として必要なことを教える中で、学生たちがホテルについて体験的な知識を持っていないことに気づいた。「ホテルに行ったことも、エレベーターに乗ったことさえもない、という学生が多くいました。私自身、ホテル勤務時代には実際に現場を見て歩くことで得たものがたくさんあったので、彼らにも本物のホテルを見る機会があればよいのではと考えました」

そこで企画したのが、実際のホテルを見学するツアーだ。井上さん自ら、首都の一流ホテルを訪ねて交渉して回った結果、7つのホテルが受け入れを表明。第1回のツアーでは学生20人と1日かけて4カ所を巡り、バックヤードを解説つきで見学させてもらった。「初めての体験に学生たちは大いに刺激を受けていて、こんなホテルで働きたい、こんなスタッフになりたい、と働くイメージが具体的に描けたようでした」

さらにはカウンターパートと共に交渉して、学校の近隣にある小規模なホテルやレストランで学生が働きながら学ぶ「1日体験トレーニング」も企画。「首都のホテルツアーに参加した経験のある学生がトレーニングに参加すると、目的意識を持って動くので働き方が違います。最初はダラダラ働いていた他の学生も良い影響を受けていきました」

ホテルやレストランとの関わりができたことでインターンシップ先が広がり、ホテルのインターンシップからそのまま就職したり、1日体験トレーニングからレストランへの就職が決まる学生も現れた。実体験の充実を図るために始めた取り組みが、学生の就職率向上にもつながっていった。

学校での環境教育手法

任地の教育関係者に向け 学校で実施できる環境啓発法を伝える

きい かおり
城井香里さん

ボリビア／環境教育／2014年度1次隊・福岡県出身



ワークショップの便宜上、ごみは会場脇の道端に埋めた。後で掘り出しやすいよう、ごみは果物用のネットに入れている

ボリビアの山間部、サンタクルス県パンパグラデ市の市役所で環境教育に取り組んだ城井香里さんは、赴任から9カ月ほどたった時期に市域にある学校の先生数十人を集めて大々的に環境ワークショップを実施した。

「派遣前の技術補完研修（現在の課題別派遣前訓練）でさまざまなアイスブレイクやネイチャーゲームの手法を教わっていて、実践の機会がないかと温めていました。そして、先輩隊員から『隊員1人が学校を巡って児童に教えるより、先生たちに教え方を伝えて各校で取り組んでもらうほうが早く広く効果が出る』と聞いたことから、教職員向けに何かできないかと思ったんです」

当日の企画で重視したのは、先生たちに手を動かして参加してもらい、目で見てパツとわかる環境啓発手法を伝えること。例えばごみの分別に関連づけ、生ごみと缶・ペットボトルといったものを一緒に埋めておき、分解の様子を全員で確認するというアクティビティを実施した。

「数日前にあらかじめ埋めていたものを、当日に先生たちと一緒に掘り起こして見せました。バナナの皮などが黒ずんで分解しているのに対し、缶などはそのまま変わらない。“百聞は一見にしかず”で大人から子どもまでとてもわかりやすいので、ぜひ現地で見せたいと思っていた手法でした」

その他にも、広場の緑地に隠した小物を探すゲームで人工物を見つける意識を刺激してから、路上のどこにごみが落ちているかチェックしながら拾い集めてもらうなど、単に理屈を知るのではなく実際に動いて体験する企画を用意。グループワークによる振り返りでは、ごみのあった場所や、その理由、今後自分たちがどう改善すべきかを考えて発表してもらうところまで行き、各校でそのまま導入できる活動パッケージとして一連のアクティビティを伝えることができた。

お悩み相談

アドバイス聞きました！

今月のお悩み

雨が少なかったためモリンガが育ちませんでした
2年目はどうしたらいいのでしょうか？

(ナミビア/コミュニティ開発)

農民の収入向上のためにモリンガの栽培を広げよう
と考えました。モリンガの葉には多くの栄養素があり、
油を抽出して現金収入源とすることもできるからです。
ところが1年目は平年に比べて雨が極端に少なく、苗
木がまったく育ちませんでした。2年目に向けて、ど
ういうことに気をつけたらいいのでしょうか。



野田先生からのアドバイス

「平年並み」を基準にできるのは限られた地域だけです
「隠された仮説」を前提にしていないか洗い出しを

日本の天気予報では、「平年に比べて何度低い」などと、平
年が基準になっています。けれども「平年」という概念自体が、
温帯で雨の多い地域を除くと、世界では通用しないと思ったほ
うがよいでしょう。

特に乾燥地では1年間に50mmの雨しか降らない年もあれ
ば、1,000mm降る年もあります。そういう地域で平均値を想
定して、「植物が育つはず」と計画してもあまり意味がありませ
ん。長期間、統計を取ってみれば、20年のうち5年くらいは雨
が降り、植物が育つかもしれません。しかし、それが自分の派
遣されている2年間に適用できるかどうかはわかりません。

実は私も、最初に乾燥地でプロジェクトを始めた頃、こうし
たことで失敗をしました。5年計画でどういう木をどれくらい植
えるかという計画を作り、それを5で割って、「毎年これくらい
植えればよい」と考えました。ところが、それぞれの年で天候
の違いから木が思うように育たないことも多く、こうした計画は
まったく機能しないと気づきました。私はこの思い込みを「平年
並み症候群」と呼んでいます。

平年並み症候群もその一つですが、現場には「隠された仮
説」がいっぱいあります。本当にそうなのか、他に条件がそろ
わなかったら成立しないのではないか…とすべてに「疑いの目」
を向けることが大切です。

モリンガを育てると収入向上につながるというのも仮説です。
収穫ができたとして、販売して流通に乗せるルートはあるの

か、数人の村人がほんの数本栽培したモリンガを業者が買
い取ってくれるのか、多くの検証が必要です。

活動計画を作る段階で、どこにどんな仮説が「隠されて」い
るか洗い出してみましょう。一例を挙げると、「住民の要望に基
づいて植樹用の苗木を用意するため、まずは任地の複数の村
の村長にインタビューする」という計画は、「どの村の村長もす
べての村人のニーズを把握する能力がある」という仮説に基
づいています。ではどうすればよいか、村を政治的に代表してい
るのは村長ですから、顔を立てるべきですが、並行して多くの
住民の意見が反映される方策を探るのがよいでしょう。大きな
プロジェクトもスタートは仮説に基づいているに過ぎませんし、
やってみて初めて気づく仮説も多いはず。常に仮説があること
を認識し、失敗に学ぶ姿勢が大切です。

今月の先生



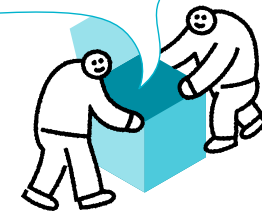
の だ な お と
野田直人さん

ホンジュラス/森林経営/1980年度1次隊、
ネパール/森林経営/1983年度2次隊・愛知県出身

三重大学の農学部林学科を卒業。協力隊員として活動した後、
1986年からJICA専門家としてベ
ルー、ボリビア、ケニア、タ
ンザニア、ミャンマーなどで勤
務。国際開発コンサルタントと
して、参加型開発を実践する草
分け的な存在。2005年に有限
会社社人の森を設立し、開発協
力実施団体向けのコンサルティ
ングや講座を実施している。ま
た、協力隊派遣前訓練・技術
補完研修の講師も務めていた。
派遣前訓練でも使用された『続
入門社会開発』など、著書多数。

Text=三澤一孔 写真提供=野田直人さん

みんなの アイデアBOX



漢字リレーの進め方

Step 1

漢字カードを用意する

表に漢字1文字、裏に読み方と例文を書いたカードを用意す
る。部首について教えるため、6～7種類の部首を取り上げ、
その部首を使った漢字を交じえた40～50枚ほどの漢字カ
ードを1セットとする。生徒5人程度のグループで取り組んで
もらうために、グループの数だけ用意する。

休	茶	何	人	話	言
木	森	体	行	花	海
信	来	薬	校	林	読

部首は言偏、木偏、さんずいなど説明しやすいものを選び、
こざと偏など意味を伝えづらいものは避ける

Step 2

生徒に漢字カードを分類してもらう

授業では、生徒たちでいくつかのグループをつくる。「どん
な分け方でもいいから、漢字を分類ごとにまとめてみましょう」
と伝え、グループ内で話し合いながら、自由な発想で分類し
てもらう。



動作に関係する漢字、学校にあるものに関係する漢字など、
いろいろな分け方が生徒たちから出てきました。
これは大きな分類で漢字を理解する練習になります(安田さん)

部首に注目するアクティビティ 「漢字リレー」をやってみよう！

1月号の「漢字デザイン」に続き、今回は「漢字リレー」を紹
介します。部首に注目して、漢字の分類や成り立ちについ
て興味を持ってもらうことが目的です。漢字デザインと漢字
リレーを組み合わせると、ほとんどの生徒が漢字の意味を
覚えてくれました。漢字学習を通じて、グループで話し合っ
たり、想像力を発揮してほしいため、まずは漢字の意
味からどう分類するか皆で相談してもらいました。



やすだ はな こ
安田華子さん

タイ/日本語教育/2021年度1次隊・鹿児島県出身
大学生時代に読んだ辺見 庸氏のルポルタージュを
通じて途上国に関心を持ち、バックパッカーとして
各国を旅した。卒業後は金融系の企業に勤務した
後、海外の人々に関わりたいたいと日本語教師に転職し、
約4年の経験を積んだ上で協力隊に参加。タイの
中高生に日本語を教えた。帰国後は空港関係の企
業で外国人従業員に日本語を教えている。

Step 3

部首について説明する

次は教師が部首の概念を教
える。例えば「木」偏だった
ら、できればイラストを交え
て、そこから漢字が形作られ
たことなどを説明した後、生
徒に部首が同じ漢字ごとに再
度、分類してもらう。

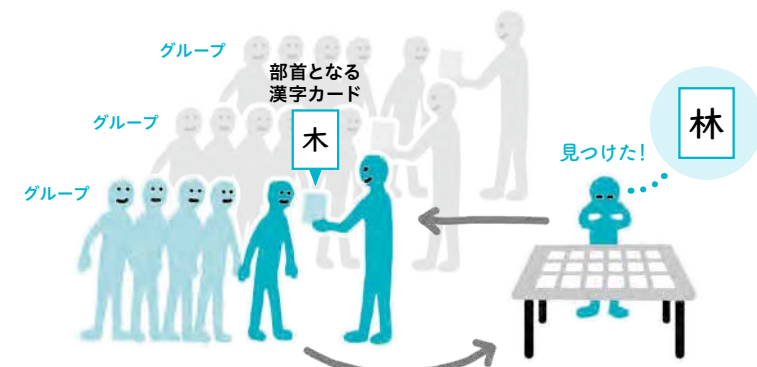


部首に着目して意味を知り、
漢字の成り立ちや形を
覚えてもらう

Step 4

漢字リレーを行う

グループごとに1列に並び、少し離れた位置にあるテー
ブルに漢字カードを置く。教師は部首となる漢字カード(例:木)
を見せ、先頭の生徒はテーブルの漢字カードからその部首を
持つ漢字(例:林)を探し出して教師に見せ、合っていれば次
の生徒にバトンタッチ。制限時間で区切り、時間内に一番多
くの漢字カードをゲットしたグループの勝ち！



Text=阿部純一(本誌) 写真提供=安田華子さん

就職ストーリー

故郷の振興にいずれ貢献するため
マネジメント能力とIT技術を身につける

Text=油科真弓 写真提供=石川栄貴さん



今月の先輩

いしかわひでたか
石川栄貴さん

短期/ラオス/コミュニティ開発/
2012年度9次隊、ネパール/野菜栽培/
2018年度3次隊・東京都出身

就職先 AKKODiSコンサルティング株式会社

事業概要 顧客の課題発見と解決のためのコンサルティング、ITインフラ構築やソフトウェア開発、IT技術分野の人材の提供などを行う。

石川栄貴さんの略歴

1992年	東京都大島町生まれ
2015年3月	大学卒業
2015年4月～16年3月	IT企業に勤務
2016年4月～18年12月	伊豆大島で就農
2019年1月	協力隊員としてネパールに赴任
2020年3月	コロナ禍による一斉帰国
2020年3月～21年1月	日本からリモートで配属先の支援活動
2021年2月	AKKODiSコンサルティング株式会社に入社

10代の頃から国際協力に携わりたいと考えていた石川栄貴さんは、拓殖大学がJICAとの連携プロジェクトを計画していることを知り、同校の国際学部農業総合コースに進学。ネパールでの研修、ラオスへの短期派遣ボランティアなどを経験し、大学卒業後は、IT企業の営業職に就き社会人経験を積んだ後、農業の技術をさらに身につけるため故郷の伊豆大島で新規就農し、協力隊に参加するタイミングを考えていた。2017年にJICAとの連携で「ネパール・農業を通じた農村地域活性化プロジェクト」が発足すると、大学の推薦を受け第1号隊員としてネパールに赴任した。

任地はネパール中部のゴルカで、地域の農家を巡回し有機栽培の技術指導や研修を行うことが要請内容だった。現地には読み書きや計算ができない人が多かったことから、石川さんは栽培や害虫駆除のマニュアルを動画で作成し、文字がわからなくても内容がわかるように工夫した。コロナ禍で帰国した後も動画のアップを続け、現地から「うまくいった」という声が多く寄せられた。ネパールの農家の支援を続けながら、石川さんはマネジメント能力とIT技術を身につけられる仕事に就きたいと考



多くの農家を回り、現地の人たちと共に有機野菜の普及に貢献した

えるようになっていった。「協力隊員として活動する中で、プロジェクトを計画し運営する能力が自分には圧倒的に足りていないと感じたこと、そしてネパールでも2時間かけて学校に通っていた村の子どもたちが、コロナ禍の影響でリモート授業を受けるようになるなど、ITによるさまざまなイノベーションが起きていることを目にしたことが大きかったです」



1年余りとはいえ、現地の農家の人々と良好な関係を築いて活動していた

実は石川さんには高校時代からの夢がある。いずれは生まれ故郷の大島町の町長になり、伊豆大島を活性化させることだ。それを実現させるためにはマネジメント能力とIT技術が欠かせないという考えが、進路を決める際の指針となった。

任期を終えたらすぐに仕事に就きたいと考えていた石川さんは、任期終了の半年ほど前から就職活動を開始。転職エージェントに登録したり、インターネットで“IT”“マネジメント”といったキーワードで検索したりしながら、自分が希望する会社を探した。AKKODiSコンサルティング株式会社への応募は、現場に入って課題を発見し、解決策を提案する方法が、協力隊経験を生かせる上、自分がやりたいことにマッチしていると感じたことが決め手となった。

「経験を積み重ねるほど、見えてくるものがあります。いろいろな経験を積み、しっかりと吸収してから、新たなステップに踏み出したいと思います」

1 新型コロナウイルスの感染拡大による一斉帰国 2020年3月

帰国してから任期終了の2021年1月まで、リモートでネパールの農家に対し有機栽培の技術指導を行うなどの支援をしました。自分の進路については、20年夏ごろに転職エージェントに登録し、IT技術とマネジメントを学べる企業の紹介を希望しました。

2 採用試験にエントリー 2020年11月

転職エージェントからの紹介を受け、AKKODiSコンサルティング株式会社の採用試験にエントリーし、履歴書と職務経歴書を提出しました。アピールポイントでは協力隊の活動を説明し、ネパールの標高3,000mの山岳地帯で毎日歩いて活動する体力があること、言葉が通じない現場で現地の人と活動するコミュニケーション能力があることなどを書きました。一方、IT技術などの専門性については私からはまったく書きませんでした。転職エージェントの担当者は困惑していたようですが、自分の目的意思やバイタリティを評価してくれる会社に入りたいという思いもあり、あえてそうしました。

3 カジュアル面談 2020年11月

エントリーから1～2週間後に、社員とのカジュアル面談が行われました。社員の方から会社の説明を受けた後、私からは会社の方向性、給与や待遇面、一社員として楽しく働ける環境なのかを、ざっくりばらんに聞きました。

4 面談 2020年12月

ウェブでの適性テストの後、面談が3回ありました。3回目の面談相手は取締役だったと入社後に知りました。いずれの面談もIT技術など専門性を確認する質問はなく、将来何がしたいかを問うものが多かったと記憶しています。それに対して、将来は故郷・伊豆大島の町長になりたいと答えました。高校時代から島を良くしたいという思いがあり、協力隊に参加したのも、コミュニティ開発や地域創生という活動が行政に生かせると思ったからです。面接でも会社で身につけたIT技術やマネジメント能力を島に還元したいと話しました。

入社 2021年2月

現在の仕事

入社から3年は、顧客の企業に常駐派遣され、課題の発見から解決方法の提案までのコンサルティングを行いました。現在は顧客から請け負ったプロジェクトのマネジメントを行っています。私が担当しているのは、3～4社のIT分野のプロジェクトで、例えばホスティングサービスの企画・管理・運営などに関わる業務です。各プロジェクトと並行して、障害者雇用にも携わっています。2026年7月に障害者の法定雇用率が2.7%に引き上げられますが、そこに向けて障害のある人材をエンジニアとして育成し、プロジェクトに参画してもらうことが今の目標です。



多くの人や部署と連携してプロジェクトを推進のりと並行して障害者雇用の促進に取り組むなど幅広い分野の業務を行っている

後輩へメッセージ

IT企業ではバイタリティやコミュニケーション能力がある人材が重宝されます。IT関係が未経験の人も、協力隊での活動がITとはまったく関係のないコミュニティ開発や野菜栽培だった人も、IT企業で働くのは無理だとは思わないでください。協力隊での経験、そこで身につけたバイタリティ、コミュニケーション能力、どんな環境にも負けない体力は、IT企業でも評価されます。たとえ自覚がなくても、そこは必ず伸びているはずなので、自分のアピールポイントになることを知っておいてほしいです。

JICA 海外協力隊ウェブサイト
「進路開拓支援のご案内」

https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/career_support/index.html



長

さ・流域面積共に九州一を誇る一級河川、筑後川の周辺地域の市民団体を対象にサポートする「一般財団法人ちくご川コミュニティ財団」。子ども・若者や災害に焦点を当てた助成事業や休眠預金等活用事業を展開し、2019年の設立から約5年で250件、2億5,561万円の支援実績がある。事業部長を務める庄田清人さんは財団のキーパーソンとして地域課題解決のためのハブの役割を果たしてきた。「財団では、資金面の支援だけでなく、組織基盤強化のための専門的支援や地域づくりにも携わります。その活動には協力隊経験が大いに生きています」

そう語る庄田さんが海外に関心を持ったのは小学生の時。アフリカの子どもが飢えて苦しむ姿をテレビで見て、「自分と同年代の子がなぜ?」と感じた。さらに中学校時代の教員に「世界へ行くなら協力隊がある」と教えられ、将来の夢を「協力隊でアフリカへ行く」ことに定めた。

その頃、打ち込んでいたサッカーで負傷して理学療法士の治療を受け、人と接する理学療法士として協力隊に参加する道に魅力を見いだした庄田さん。高校を卒業するとリハビリテーションの専門学校で学び、その後は福岡県の聖マリア病院で働いた。業務の傍ら、同院設立のNPO法人ISAPHによる海外スタディツアーに参加するなど海外経験も積み、ついに14年、現職参加でマラウイへ派遣された。「専門の理学療法士ではなく、公衆衛生分野の要請とはいえコミュニティ開発だったので、自分が役に立てるのか?との

不安はありました。ただ、理学療法士として1人の患者さんと相対するこれまでの経験と異なり、地域を広く見て活動する視点を得られるのではないかとチャレンジしました」

庄田さんの主な活動は北部ムジンバ県の村々を巡回して乳幼児検診を実施すること。「青空の下、1回の検診に100～200人が集まる“カオス”な状態。ワクチン接種年齢の記録や計測のミスもありました」。そんな中、生後5カ月で3,000gに満たない乳児が見つかった。近くに大きな病院もない中、村内でできることを探った結果、乳児に直接治療などを行うのではなく母親の栄養改善にアプローチすることになった。「9カ月後、標準体重にまで増えました。同僚と議論を重ねて赤ちゃんの命を守った経験はとても貴重です」

さらに、記録ミスが多かったヘルスパスポート(母子手帳)に関する基礎調査に取り組んで国を挙げた改訂プロジェクトにつなげるなどの活動の傍ら、任地でスポーツ大会も開催。青少年育成の一助として企画したが、部族長や村長、教員など多様な人と普段から培っていた信頼関係が礎になり、皆の協力の下、延べ参加者数6,000人に上るイベントに発展した。帰国・復職後は新たにできた聖マリアヘルスケアセンターでリハビリ部門のチームリーダーとして後輩の育成に尽力したが、1年半後に故郷の福岡県飯塚市へ戻った。「きっかけは母の介護のためですが、協力隊の経験から、病院の中だけでなく、地域で何らかの取り組みをしたいという思いが強くなっていました」

18年に個人事業主として独立し、制度のはざまにいて病院で治療を受けられない“リハビリ難民”のための事業を目指したほか、地元のまちづくり会社の誘いを受けて、地域ヘルスケアやSDGs教育にも携わった。

そして同年、協力隊時代の縁もあって、ちくご川コミュニティ財団での仕事に関わるようになる。子どもの学習や食の支援を行う無料塾、若者の自立を支える団体などさまざまな非営利組織をサポートしてきたが、財団の仕事はマラウイで試行錯誤を繰り返した日々の延長上にあると庄田さんは強調する。「一人ひとりの声を聞いて実行団体が抱える課題を整理し、全体を俯瞰しつつ伴走しながら解決策を考える。この過程は、まさにマラウイで実践したことと同じ。隊員研修などで学んだプロジェクト・サイクル・マネジメント(PCM)の知見も応用しています」

特に大切にしているのは、支援先の団体と「対等なパートナーであり続けること」と話す庄田さん。「資金を提供する側・される側という関係性では絶対にうまくいきません。役割は違っても目指す目標は同じで、相手への尊敬、そして一緒に進んでいく姿勢が基礎になる。この視点はマラウイでの協力隊員としての活動を通じて学んだことです」

地域社会にある多様で複雑な課題を目の当たりにし、解決の難しさを感じるが、目の前にある困難を決して放っておかない。その覚悟を胸に、庄田さんはこれからもたくさんの人を巻き込みながら走り続けていく。

庄田さんの歩み

2009年 専門学校卒業後、聖マリア病院に5年間勤務

2014年 現職参加で協力隊員としてマラウイへ



元々は理学療法士の職種での参加をイメージしていましたが、コミュニティ開発で参加。地域に出て多様な視点で活動した経験が、今の仕事でも生きています

2017年 帰国し、聖マリアヘルスケアセンターに勤務



最先端の設備が整った新設のリハビリ施設に配属され、マラウイとのギャップに戸惑いましたが、隊員時代に培った「なんとかかなる」の精神で乗り越えました

2018年 故郷の福岡県飯塚市で起業



まちづくり事業や高校の非常勤講師などいろいろな活動を模索。県内在住のマラウイ人との出会いをきっかけに団体を設立し、日本とマラウイをつなぐ事業も始めました

2020年 まちづくり会社のゼネラルマネージャーに。同年、ちくご川コミュニティ財団に出向



この会社ではリノベーションしたシェア空間で市民のヘルスケアやSDGs教育などを行い、地域活性化に取り組みました

2022年 ちくご川コミュニティ財団の理事兼事業部長に就任

2024年 民間財団では九州初の奨学金事業を開始



孤立しがちな不登校の子どもを支えるため、フリースクールなどの利用料を補助する奨学金事業を開始。奨学生との面談を通じて子どもたちの置かれた状況の厳しさを痛感し、公的制度として組み入れられるよう、自治体などへの働きかけにも力を入れています

派遣から始まる未来

先輩隊員たちの社会還元

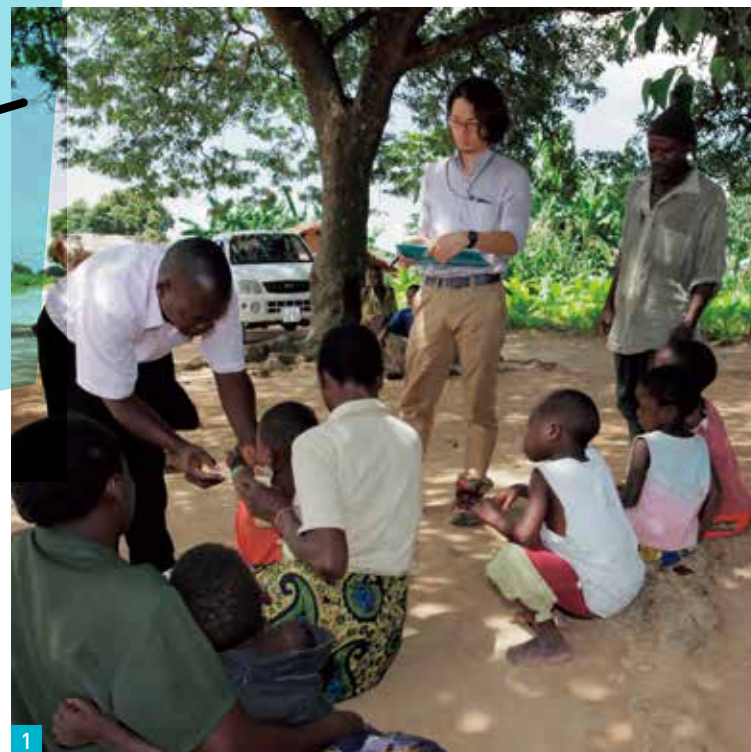


社会課題に挑む団体を伴走支援する財団で理事・事業部長として活躍

しょうた きよひと
庄田清人さん

マラウイ/コミュニティ開発/2014年度2次隊・福岡県出身

Text=新海美保 写真提供=庄田清人さん



1



1 村落部では人材が不足していて、短い研修を受けただけの保健師やボランティアスタッフが多い中、共に乳幼児検診や栄養改善プログラムに取り組んだ 2 助成対象の団体と実施したワークショップ 3 ちくご川コミュニティ財団のメンバーたちと

2



3

NEWS

協力隊60周年特設サイトと60周年ロゴ公開

1965年12月にラオスへの派遣から始まったJICA海外協力隊事業が、2025年で60周年を迎えます。青年海外協力隊事務局では、特設HPを開設し、記念動画、記念ロゴを公開し、各関連イベントをご案内してまいります。記念ロゴは、現役・帰国隊員に制作を呼び掛け、山根文子さんのデザインに決定しました。「日本と開発途上国をむすぶ懸け橋」をテーマに、開発途上国発展のためのJICAの主な活動―教育、技術、医療などを虹色の懸け橋として日本と途上国の協力関係を表しています。



▲JICA海外協力隊
発足60周年特設HPは
こちら

RECRUIT

JICA海外協力隊の2025年春募集を開始

JICA海外協力隊（長期派遣）の2025年春募集を実施します。募集要項の公開とマイページ登録は25年2月28日（金）に開始。同3月21日（金）～5月9日（金）正午を募集期間とし、最終可否通知は8月28日（木）を予定しています。お知り合いの方などにもぜひお声がけください。



募集情報はこちら▶



EVENT

大阪万博でJICA海外協力隊プログラム パネルトーク開催予定

4月13日（日）から開催予定の大阪・関西万博で、4月25日（金）にJICA海外協力隊プログラムとして“世界と日本を変える力”のテーマを掲げたパネルトークが行われます。

第1部では『地域の国際化の推進』、第2部では『多文化共生社会の実現』について取り上げます。オンラインでも無料配信予定です。参加ご希望の方は以下より詳細をご確認ください。



▲第1部詳細は
こちら



▲第2部詳細は
こちら

EVENT

協力隊まつり2025 開催のお知らせ

JICA海外協力隊を広く一般の方々に身近に感じ、興味を持ってもらうことを目的として、「協力隊まつり」を、4月19日（土）・20日（日）にJICA地球広場（JICA市ヶ谷ビル）のリアル会場およびオンラインで開催します。入退場は無料。ぜひお誘い合わせのうえご参加ください。



協力隊まつり2025
開催概要はこちら▶



MOVIE

第2回 JICA海外協力隊 帰国隊員社会還元表彰 受賞者の動画を公開！

青年海外協力隊事務局では、帰国後も活躍されるOVの動画を多数公開中です。今月は、第2回社会還元表彰受賞者のうち、3人の動画を新しく公開予定です。海外や国内で活躍するOVの社会還元活動をぜひご覧ください。



社会還元表彰者
プロモーション動画はこちら▶



編集後記

今回の「特集」では、エジプトの現役隊員たちによる体育分科会での活動を紹介。先輩から引き継いできた成果が形となりつつある様子を、誌面での取り上げさせていただきました。仲間同士での協働／個人の取り組みのいずれでも、こんな活動を実施しました！というトピックがありましたら、ぜひ編集室までメールをお寄せください。（飯渕一樹）

「派遣国の横顔」で取材させていただいた矢澤さんは、出発前に宮内庁で皇族への拝謁があり、マニラ国際空港（当時）に到着すると日本大使の出迎えを受け、そのまま記者会見、その後、大使公邸での歓迎レセプションがあったそうです。国を挙げた事業のスタートがいかにか華々しかったかが想像できるお話でした。（阿部純一）

クロスロード

【2025年3月号】 第61巻第2号 通巻704号
発行日：2025（令和7）年3月1日

編集・発行：独立行政法人国際協力機構 青年海外協力隊事務局
〒100-0004 東京都千代田区大手町1-4-1 竹橋合同ビル

制作協力：一般社団法人協力隊を育てる会『クロスロード』編集室
〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-28-7 昇龍館ビル2階
デザイン：亀井敏夫
印刷・製本：弘報印刷（株） 校正：佐藤智也

本誌へのご意見・ご感想をお聞かせください。
アイデアも大募集中です。

今号の『クロスロード』はいかがでしたか。ぜひご意見やご感想を編集室のメールにお寄せください。「こんな記事があれば派遣先で役立つのに」「こんな記事なら読みたい」といったご要望やアイデアも随時募集しています。

『クロスロード』編集室
crossroads@sojocv.or.jp



●本誌掲載の記事、写真、イラストなどの無断転載を禁じます。
●本誌に掲載されている記事等の内容は、協力隊員（OV含む）の個人的見解であり、JICAの公式見解を示すものではありません。

『クロスロード』は、
JICA海外協力隊の
ウェブサイトでも公開しています。
<https://www.jica.go.jp/volunteer/outline/publication/pamphlet/crossroad/index.html>



JICA海外協力隊派遣現況

2025年1月末現在

現在の
派遣国数
74カ国



アフリカ地域

国名	一般	シニア
ウガンダ	31	1
エチオピア	15	
ガーナ	44	
ガボン	10	1
カメルーン	16	
ケニア	37	1
ザンビア	37	1
ジブチ	13	
ジンバブエ	15	
セネガル	39	1
タンザニア	34	
ナミビア	8	
ベナン	29	
ボツワナ	28	2
マダガスカル	31	
マラウイ	47	
南アフリカ共和国	5	
モザンビーク	31	1
ルワンダ	30	1

アジア地域

国名	一般	シニア
インド	16	
インドネシア	41	
ウズベキスタン	16	
カンボジア	28	
キルギス	36	
ジョージア	12	1
スリランカ	26	
タイ	38	3
タジキスタン		4
ネパール	10	3
バングラデシュ	2	
東ティモール	25	
フィリピン	16	
ブータン	24	1
ベトナム	44	
マレーシア	23	2
モルディブ	4	
モンゴル	43	5
ラオス	43	2

大洋州地域

国名	一般	シニア
キリバス	3	
サモア	9	
ソロモン	20	1
トンガ	13	1
バヌアツ	15	
バブアニューギニア	17	
パラオ	26	3
フィジー	18	3
マーシャル	11	3
ミクロネシア	15	2

欧州地域

国名	一般	シニア
セルビア	10	

中東地域

国名	一般	シニア
エジプト	27	
チュニジア	10	1
モロッコ	38	1
ヨルダン	20	

中南米地域

国名	一般	シニア	日系一般	日系シニア
アルゼンチン		6	6	2
ウルグアイ		5		
エクアドル	31	3		
エルサルバドル	29			
キューバ		3		
グアテマラ	22			
コスタリカ	19			
コロンビア	26	6		
ジャマイカ	12			
セントルシア	13	1		
チリ	9	1		
ドミニカ共和国	16	1	8	
ニカラグア	18			
パナマ	18	2		
パラグアイ	21	4	7	1
ブラジル			49	1
ベリーズ	16			
ペルー	43	1		
ボリビア	46	1		
ホンジュラス	32			
メキシコ	18	10		

合計

	一般	シニア	日系一般	日系シニア	小計
派遣中 （男性／女性）	1,588 (617／971)	89 (68／21)	70 (28／42)	4 (2／2)	1,751 (715／1,036)
累計 （男性／女性）	48,441 (25,392／23,049)	6,723 (5,427／1,296)	1,654 (642／1,012)	555 (256／299)	57,373 (31,717／25,656)

一般＝青年海外協力隊／海外協力隊 シニア＝シニア海外協力隊 日系一般＝日系社会青年海外協力隊／日系社会海外協力隊 日系シニア＝日系社会シニア海外協力隊 （単位：人）

あの日、地球の、あの場所で。

任地の思い出を聞きました。

ヨルダンのバスで立っていると注意を受けてびっくり!

新庄芳菜恵さん

広島県JICAデスク

ヨルダン／障害児・者支援／2014年度1次隊・広島県出身

ヨルダンの首都アンマンでは、運賃の安い乗り合いバスが日常の足となっています。私も普段から利用していましたが、イスラム圏では女性が男性の隣に座ることが良しとされないため、私も女性の隣にしか座らないように心がけていました。

そんなある日、乗り込んだバスが混んでいて適当な席が見当たらず、立ったままでしたところ、車掌から「なぜ立っているんだ!」と強めの口調で言われてびっくり。そして座っていた男性客が声を聞きつけるとすぐ立ち上がって席を譲ってくれたのでさらに面食らいました。これもムスリムの文化で、女性や年長者を大切にする道徳観が深く根差しているため、女性の私を立たせている状況など言語道断!という一種の親切だったのです。

この体験は意外な驚きとして印象的でしたが、

日々の暮らしの中でも、親切や気遣いをよく受けました。私が道に迷った時など、尋ねもしないのに人が集まりあれこれと道順を教えてください…。知らないのに何かしら教えて助けてくれようとする人もいて、余計に時間がかかる時もありましたが、それもまた彼らのサービス精神なのでしょう。

そんな環境に完全になじんで帰国してJICAの帰国時プログラムで東京に滞在していた時、慣れない都内の路上でキョロキョロしながら、無意識に誰かが声をかけてくれるのを待っていた私。しばらくして「ハッ、日本では自分から道を聞かなきゃいけないだった!」と気づきました。その半面、聞けば正しい情報を教えてもらえるのが日本の良いところではありますが、何だか寂しいなあ…とも感じてしまう“逆カルチャーショック”体験でした。



Illustration=牧野良幸 Text=飯淵一樹(本誌)

任地の食生活に彩りさ!

隊員めし

今月の料理・ルワンダ

ピーナッツのkokがおいしい家庭料理

イビジュンバ



From Rwanda



前田さんがルワンダでよく食べていた「プロシェット」と呼ばれるヤギ肉のくし焼き



教える人



前田尋貴さん

ルワンダ／コミュニティ開発／2019年度3次隊・福島県出身

訓練所がある二本松市の隣、松川町で大学生時代を過ごした。在学中にルワンダを支援するNPO法人に関わる中で協力隊活動に興味を抱き、二本松訓練所のイベントなどに参加。卒業後、金融機関に約3年間勤務した後、ルワンダにコミュニティ開発隊員として赴任し、コーヒー農家を支援した。帰国後は沖縄県のコーヒー園に就職し、生産や収穫体験などに携わる。同時に大学院で農学を研究し、沖縄のコーヒー生産量の拡大を目指している。



任地のコーヒー農家からより良い栽培方法を学びつつ、その方法を他の農家にも共有していく活動をした前田さん

材料(2人分)

サツマイモ……………4本
トマト……………3個
タマネギ……………1/2個
粉状のピーナッツ(※1)……………大さじ3程度
ニンニク……………1かけ
コンソメキューブ……………1個
塩……………適量

※1 粉状のピーナッツ…ルワンダでは生のピーナッツを製粉したものを使っているのですが、代用として、乾燥のピーナッツパウダー、ピーナッツを細かくたたきつぶしたもの、バターピーナッツを水に浸してやわらかくしてミキサーで粉々にしたものでも変わりなく作れます。

レシピ

- ① サツマイモの皮を包丁でむいて、一口大に切る。
- ② トマトは小さめのざく切り、タマネギはくし切り、ニンニクはみじん切りにする。
- ③ ①のサツマイモを鍋に入れ、サツマイモの半分くらいの水を入れてふたをし、ふかす。竹ぐしなどを刺してみて、中までやわらかくなったら火を止めて皿に移す。
- ④ 別の鍋かフライパンでニンニクとタマネギを炒める。
- ⑤ タマネギがしんなりしたらトマトを入れて、トマトを潰しながら、トマトから出た水分で煮込む。
- ⑥ トマトの形が崩れてきたら粉状のピーナッツを入れる(※2)。ピーナッツを入れると水を吸うので、水分が足りないなら水を足し、とろみのあるソース状にする。
- ⑦ コンソメキューブを入れ、最後に塩で味を調整してソースの完成。サツマイモにかけていただく。

※2 粉状のピーナッツの分量…水分にとろみが出るくらいを目安に入れる。少なめであっさり味に、多く入れるとkokが強くなるため、好みの濃さになるように入れる。

料理について /

料理名の「イビジュンバ」というのはルワンダ語でサツマイモの意味です。キャッサバ、米と並ぶ主食の一つとして、ルワンダではサツマイモがよく食べられています。この料理はサツマイモの甘味と落花生のkokが良い感じにマッチしていて、とてもおいしいです。ソースの部分は万能で、サツマイモをジャガイモにしてもよいし、私はよくパスタにかけて食べていました。ちなみに落花生の粉はたくさん入れるのが好きです。



公開！

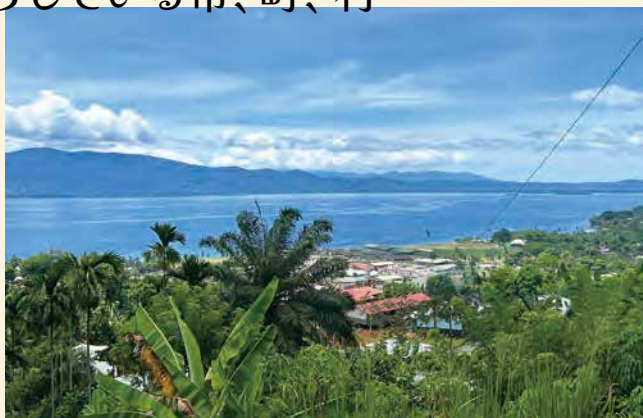
私の派遣国生活

[パプアニューギニア]

写真提供=望月賢人さん Text=海原美帆

もちづきけん と
望月賢人さんコミュニティ開発/
2023年度3次隊・静岡県出身

暮らしている市、町、村



陸にはアブラヤシ農園、海にはサンゴ礁が広がるアロタウ

600以上の島から成るミルンバイ州の州都アロタウはクイーン・エリザベス号の寄港地にもなっているにぎやかな港町なので多種多様な人々が行き交い、話されている言語の数も50近く！それぞれの民族がルーツに誇りを持って暮らしています。周辺の離島の美しさもまた格別で、旧日本軍にゆかりのあるサマライ島で9月に桜が咲いていたのには感動しました。



毎年11月に開催される「ケヌ&クンドゥーフェスティバル」というカヌーと踊りの祭り

活動の様子

アロタウのコミュニティ開発局の市民相談課に配属されて活動しています。システムエンジニアの経験を生かし、児童虐待やジェンダーによる暴力、貧困など市民から受けた相談をデータベース化して部署内で共有できるようにしました。すると、そのデータを活用する新しい提案が同僚たちから次々出るようになり、非常にやりがいを感じます。市民に真剣に向き合う彼らの姿に日々刺激を受けています。



「子どもの権利条約」について学ぶワークショップ。すべての子どもたちが持つ権利について理解してもらうことも大切な取り組みの一つ

小麦粉とココナツクリームをこねて丸め、ココナツオイルで揚げた「モナ」。
ほのかに甘く、もちもちでおいしい



食べ物

マーケットでは、野菜や果物が安く豊富に売られています。海に囲まれているのに現地の人は魚にはあまり興味がなく、何の魚か聞いてもよくわかっておらず、単に大きさと値段が決めているのが驚きでした。スーパーもあり、しょうゆやめんつゆなど基本的には何でもそろいます。



鶏肉や野菜にココナツミルクを加えて焼き石で蒸した「アイギル」と呼ばれる料理(写真奥)。米もよく食べられている

住まい



奥がキッチン。クーラーはないので天井のシーリングファンが大活躍

同期隊員と一軒家をシェアしていて、バス・トイレ、キッチン、リビングは共用。キッチンには冷蔵庫と4口のガスコンロがあり、自炊もしやすいです。活動時間が違うのでそれぞれ自由に生活しているのですが、いざという時は助け合えるのが心強いです。太陽熱温水器を利用して給湯しているため、雨がずっとと温水がたまらず冷水シャワーになることも。電気は、日中の7時から18時までは計画停電で止まっています。クーラーがなくて夜でも少し暑いのですが、マラリア予防のため寝る時は蚊帳が必須です。



JICA海外協力隊
応援基金
皆様からの応援
お待ちしております



青年海外協力隊事務局
公式Instagram
JICA海外協力隊のリアル
お見せします



JICA_KYORYOKUTAI

JICA海外協力隊
公式LINEアカウント
シゴト診断、教えて！FAQ
などぜひ活用下さい

